

イスラム教徒は世界で約15億人いると言われており、信仰深く敬虔な人たちとして知られている。ところが昨今のイスラム国の残虐な行動は全てのイスラム教徒がさも残虐な人たちだと誤解されていることは気の毒である。筆者は海外生活20年の内15年をイスラム諸国で過ごした。そしてその約半分の6年余(1976年1月~1982年4月)をサウジアラビア(当時の人口は860万人、現在3,300万人)で家族と共に過ごした。その経験から彼らの多くは真面目で敬虔なモスリムでありかつ信頼できる人たちだと思っている。

当時筆者の勤めるC社はサウジで既に業務実績があり更に業績を伸ばすべく現地会社を設立し筆者は東部地区の代表として現地に赴任することになった。同僚は生活環境が厳しく酒が飲めなくなるが大丈夫か。家内はあの暑いサウジへ?と驚いた。それはサウジの情報が少なく大きな不安を感じたからだ。しかし当時小学1年生であった長男はTVに夢中になっていて勉強がおろそかになっていた。子供たちに日本のTVが見られなくなるがサウジに行きたいかとの質問に二人とも飛行機に乗れるから行きたいとの返事。勿論家内と子供の教育について話し合い日本のTV番組が見られない環境は子供たちが勉強や読書に集中できると期待し、生活環境が厳しい国と言われていたが、家族を帯同することを決心した。

サウジの第一印象

1976年4月羽田を出発しパリ経由ジェッダに夜到着。約20時間の長旅であった。時は4月とは言え既に真夏のジェッダは猛烈に暑くその上空港の内外は人でごった返しており汗の匂いと長旅の疲労、長い入国手続きですっかり疲れ、ひどい国に来たとは家内の第一印象だ。その上携行荷物のうち2個が見つからない。この2個にはランドセルと学用品が入っていて、明日から学校で使うものばかりである。子供たちは日本へ帰りたいと泣きだす始末であった。

入国早々こんなトラブルに会い家族を連れてくるべきでなかったと反省したが後の祭りであった。紛失荷物は結局見つからず被害を蒙った子供たちの悲しみは如何ばかりだったか計り知れない。

生活環境

東部地区の主要な町ダハランにはダハラン国際空港、石油鉱物資源大学(UPM)、ダハランアカデミー(通称アメリカンスクール)、及びアラムコ(現在国有化されサウジアラムコに社名変更)がある。アラムコはアメリカのメジャー石油会社4社が所有する世界一の石油掘削会社である。

当時従業員5万人の1割の5,000人がアメリカ人であった。その多くは本社に隣接するコンパウンドに住んでいた。加えてノースロップ等米系企業の従業員が働いていたためダハランを含めた東部地区ダンマン及びアルコバールはまさにアメリカ人の町で第2テキサス州と呼ばれていた。他に出稼ぎ外国人が多く一瞬イスラムの国にいることを忘れさせたが、そこはイスラム教の盟主サウジでは外国人も含め住民には戒律が厳しく適用された。この為町には鞭を持った宗教警察が巡回し厳しく指導していた。



サウジアラビア地図



石油鉱物資源大学(UPM)



石油鉱物資源大学(UPM)の講義風景

冬場3か月間はセーターがいるが夏場は気温が50度位に上昇。車のボンネットで目玉焼きが出来ると言われた。湿度が高く屋外の生活は厳しかった。通常の勤務時間は朝8時から午後1時までと午後4時から7時まで。ラマダン中は朝7時から午後2時までのone shiftであった。

筆者が赴任時の1976年始め、この地区に住む日本人は3家族約20人。1978年3月日本人会社設立時点で進出企業数は30社、15家族、77人。その後増え1982年には約300人になった。

食事

赴任当初食材の調達は苦労した。町で売っているコメはエジプト米で炊き方を変えてもあまり美味しくはならなかった。幸いアラムコへ油井管を運んでいる日本の船会社のご好意によりコメなどの日本食を船長託送便として運んで戴き日本食を楽しむことが出来た。

食材も段々と手に入りようになりアラビア湾で水揚げされる魚類、内陸部のオアシスで栽培される野菜が手に入った。当時レストランは少なく料理も

限られていたので、顧客、出張者、単身赴任者や友人たちを自宅にお呼びし家内の家庭料理を楽しんで頂いた。勿論アルコール抜きである。招待者記録によると6年間で我が家に500組のお客をお呼びしている。家内には本当に良く協力してくれたと彼女の「おもてなし」には今でも感謝している。

住居

女性の運転は禁止されていて、女性・子供は1人で戸外を歩けないので1日の殆どを家ですごした。外出の場合肌の露出は禁じられていてスカーフやスラックス姿での外出となった。住む家は町の1軒屋を借りた。隣人はイギリス人であった。家は比較的大きく我が家の場合1階建て3LDK 200m²位の広さであった。室内はA/Cが効いていて快適である(たびたび停電していた)。

イラン革命の時期にはシーア派の人たちがイランやバーレンから海を渡って逃げてきて我々の住む地区でもウロウロし夜は表に出ない様に言われ不安な日々を過ごした。特に1軒屋は壁1枚で外なので安全上不安を感じた。1978年頃から安全で住み心地が良いコンパウンドがあちこちに出来、多くの日本人はそちらへ移って行った。

衛生

衛生状態は非常に悪かった。特にゴキブリは所かまわず多くが這い回り閉口した。魚市場では魚に大量のハエがたかっていた。水道水(上水)は飲料としては不適で雑用水として利用した。また上水と下水のパイプが破損し上水パイプに下水が混ざることがあり安心できなかった。赴任して1-2年たつてからようやく行政は衛生状態改善の為小型飛行機を使い空からDDTを大量に散布したものだ。

娯楽

最も盛んだったスポーツはテニスであった。昼間は暑くてできないので夜仲間とプレイした。

日本人会でもソフトボール大会、テニス大会、卓球大会、マージャン大会、カラオケ大会、バーベキュー大会、忘年会など開催し友好とストレス解消に心がけた。

夜の楽しみはアルコバールの商店街(横浜の元街商店街に似ている)で家族と一緒に買い物やウインドーショッピングをすることであった。金持ちの国ゆえ高級品を扱う店が多かった。

特にラマダン明けの休みは通りが動けないほどの人が集まってきた。



砂漠でのピクニック



リヤド近郊のキャラバンロード

娯楽や遊ぶ場所が極端に少ないので日本人会のネットワークを通じ日本人家族同士の付き合いが盛んになっていった。この厳しい環境で苦楽を共有してきた友人達との関係は必然的に戦友としての関係になり40年を経過した今でも継続している。

サウジの生活で得たこと

オイルショック後豊富な石油収入を基にサウジは自国を近代化してきた。赴任当時ダンマンから東部地区の工業地帯になるアルジュベールまで小さな村落が砂漠であった。然し数年後より始まった道路、港湾、空港などのインフラ設備及びアルジュベールの石油化学プロジェクトが一斉に始まり東部地区には世界中から建設関係者が集まり、正にこの地区は建設現場の真ただ中であった。このような2度と経験することが無い、町中躍動する場所で仕事が出来、色々経験し多くの人々と知り合うことが出来たことは大変幸せであった。ここでの仕事で得た知識や経験や人脈は以後の業務に大変役に立った。

子供たちはサウジに生活を開始した時は小学6年生と2年生であった。周りに同学年の日本人がいなくてクラスでただ1人の日本人として最初は寂しくつらい思いをした。しかし2人とも困難を乗り越えサウジでの生活を有意義に過ごしてきた。今ではサウジでの生活を懐かしがっている。

家内が云うには、家で過ごすことが多かったサウジでは日本に比べ家族の接触が多く、子供達と向き合う機会が多くあったことは子供の教育上大変良かったと語っている。

当時の生活状況について披露しましたが、40年も過ぎた現在では様子随分と変わってきていると思います。ただお話としてお読みください。赴任や出張の際には現状を良く確認されます様に。

*ふくだ・しんいちろう JECK副理事長 専門分野:経営工学、プロジェクト・マネージメント JICA任地:ウズベキスタン、中国 JICA以外の任地:中央アジア、ロシア、UAE、マレーシア、イギリス、サウジアラビア、インド